

2021 年度
情報経営イノベーション専門職大学
入学者選抜試験 一般入試 B 日程

国語

注意事項

1. 試験時間は 60 分。
2. 試験開始の合図があるまで開かないこと。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページ落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせること。
4. 解答用紙には解答欄以外に受験番号等の記入欄があるので、監督者の指示に従ってそれぞれ正しく記入すること。
5. 解答は、問題に対応した解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 問題冊子は持ち帰らないこと。
7. 試験終了まで退出しないこと。



次の問題に答えなさい。

問1 次の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、のちの①～⑤の中からそれぞれ選びなさい。

A 改革をテイシヨウする政府。解答番号は、。

- ① コウシヨウな趣味をもつ
- ② 雪のケツシヨウは美しい
- ③ 賛美歌をガツシヨウする
- ④ 友人を自宅にシヨウタイする
- ⑤ 電車の遅延をシヨウメイする

B 犯人がヒソむとすればあの建物だ。解答番号は、。

- ① 敵の城にセンニユウする
- ② 開会式での選手センセイ
- ③ センゾクの契約をする
- ④ センメイな記憶
- ⑤ 教育理論をジッセンする

C 優勝をのがしてラクタンした。解答番号は、

3

- ① 医療費を国がフタンする
- ② タンセイな顔立ち
- ③ 審査員はレイタンな態度をとった
- ④ 物を売りつけようというコンタン
- ⑤ タンチョウな作業はあきる

D ピアノのバンソウがとても美しく響く。解答番号は、

4

- ① 家族ドウハンの旅
- ② ハンカナ大都会
- ③ 資材のハンニュー
- ④ 見本品をハンブする
- ⑤ 書籍がジユウハンされた

E 高校野球の大会はコウキユウ的に一つの球場で開催される。解答番号は、

5

- ① コウレイの盆踊り
- ② 社会の進歩にコウケンする
- ③ 地域シンコウのための施策
- ④ キンコウ状態は破られた
- ⑤ 病気はシヨウコウコウ状態を保つ

二
次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

先年、斑鳩いかるがの古塔再建のことに少しかかわっていたので、その塔工事の棟梁ぢりょうをつとめる西岡さんと、お近付きになることができた。

西岡さんは父椿光なつみつ、長男常一、次男椿二郎と一家三人そろって、ともに堂塔古建築で知られる棟梁たちである。こういう高度の特殊技能をもつ棟梁たちと、堂塔も建築も皆目わからない私とでは、話が釣合つりあうわけはないのだが、西岡さん三人は丁寧で親切に、誠実にものを教えてくれたし、折あるごとに心にしみるいくつものいい話をきかせてくれた。

三人は血のつながる親子兄弟であり、同じ道にはげんできた人たちだが、姿や形もちがうし、ものの思い方や性格もちがいがい、三者三様の個性を示していた。でも、時によると表情や気持の動きに、微妙によく似た節もみえたり、特に仕事の上での意見が、びたりと合致することもあり、そういう時はみごとだった。性格はちがっても、技能の到達点の一つしかない、ということだろうか、と思わされた。

三人が一番先に私に教えてくれたことは、木は生きている、ということだった。むろん三人同坐どうざで教えてくれたのではない。時も所も別々の生命を終ったあとの「材」をさす。私は緑の葉をもつ立木を、生きている木だと思い、材になった木が生きているとは思わなかった。しかし西岡さんたちは、木は立木のうちの命と、材になつてからの命と、二度の命をもつものだ、という。棟梁たちは法隆寺の大修覆を手がけており、千二百年も前の古材を手につれ、腕にかかえ、皮膚で、肌はだで知っている人である。そういう貴重な経験の上で信念をもって、木は生きている、という。法隆寺千二百年の昔の材に、ひと鉋かんあてれば、いきいきとしたきめと光沢のある肌を現し、芳香をたてる。湿気を吸えばふくよかに乾燥すればしかむ。これは生きている証ではないか。強風には撓たわみ、地震にも歪ゆがむが、よく耐えてまた元に戻る。これも生きている証拠しんこじゃないか、という。なるほどと思い、わかったような気もしたし、また、所詮しよせんは実地に納得するよりほか、すっきりとわかりつくことはできまいとも思った。

このことは折あるごとに、何度も繰り返して教えられ、度重ねてきくうちにやがておぼろげながら「木は生きている」の一言は西岡さんが、工匠の心構えとして基本に据えている、大切なものではなからうかと気付いた。

塔の建築が行われているあいだ、私は斑鳩に移って、仮住居かりすまいをしていた。別にそうする必要があったわけではなく、ただなんとなく成行き上、見ていたかったからである。さいわいなことに工事は順調に進み、細部を残してほぼ出来上り、私の滞在も一年を越し、そろそろ帰京の心積り

もしようかとしていた。そんなある日、弟棟梁の檜二郎さんが立寄ってくれた。私のいるところは、ちょうど檜二郎さんの出勤路の途中にあるので、時折たずねてくれる。もの静かな人で、話も静かだが気さくに、これまでこなしてきた仕事のことなどきかせてくれた。その日は来たときから少し調子が重かったが、やがて渋りながら、今日の話は、どうも縁起のいい話じゃないと思うので、しようか、しまいかと考えあぐねているのだが、という。なんの話かときいたところ、木の死んだのことです。

どんな良材、強材であろうと木には木の寿命があり、寿命が尽きれば死ぬ。寿命を使いつくして死んだ木の姿は、生きている木にはない、また別の貴さ、安らかさがある、檜二郎さんはたまたまなく心惹かれるという。もし縁起をかまわないのなら、木の死んだのも見ておいてもらいたい。生きている木ばかり見せておいたのでは、片手落ちなわけで、生きても死んでも、木というものは立派だ、と知っておいてもらいたいし、一度それを見ておけば、きつとあなたの何かの役にたつと思う、という。なんという心の深さだろうと、打たれてしまって、ただ有難うというばかりしかできなかった。

翌日、早速見せてもらった。檜と杉と松だった。ひと目みて、これは全く寿命の限りを生きつくして、然し、はつきり檜は檜、杉は杉の面影を残して終っている、と肯けた。生きて役立っていた時の張りや力をすっかり消して、その代りに気易げに、なんのこだわりもなく鎮まっている、自然の寿命が尽きるというのは、こういう安息の雰囲気をかますものなのだろうかと思った。なにかは知らず、安堵感のようなものもあり、名残惜しさのようなものもあり、けれども、ちっともベトつかない、質のいい感動があった。しかも、なんとなくわかった気のあることがあった。それはかつて西岡三棟梁が、それぞれ一番はじめに私に教えてくれた、木は生きている、ということの滞りが解けたのである。

A

その後まもなく私は東京へ戻った。戻れば戻ったで、留守の間につかえていたあれこれに追われ、そのうち年齢のせいか出億劫になるやら、足許がおぼつかなくなるやらで、斑鳩へはご無沙汰をした。

そしてこの二月、朝の新聞に檜二郎さんの訃報が載っているのを見た。心不全で、仕事の現場で倒れ、手当も空しく、さつと逝ってしまった。たようである。なによりもまず思い合わせるの、実物を示して木の終りを教えられたことである。死の話だから縁起が悪かろうと遠慮しながらも、生きている木ばかり見せて、死んだ姿を教えないのは、片手落ちだから、といい、生きるも死ぬも木は立派だと教え、一度見ておけば、きつとなにかの足しになるというすすめ、等々は忘れられない強い印象で残っている。この教えは、亡くなられたから特に思い出したというのではなくて、檜二郎さんといえはいつもひとりで浮かんてくる記憶だった。ずいぶんいい話をきかせてもらったと思う。いい話をきかせてもらうことは、いつ迄も減らない福を贈られたと同じである。

檜二郎さんはまた、こんな嘆きを洩らしていたこともある。大工という職業は、小屋でも家でもを造り増やしていくから、一寸見には冥加に

叶かなう商売のようにきこえるが、実のところは何も彼かもを、みんな小さく減らしていく仕事なのだ。木は切り、削り、掘って小さくするし、そのために使う刃物は研いで減らすし、研げば砥石とじしを磨滅まめつさせ、その砥石を使う自分自身も、いつか気付かぬまに命を減らしている。あまり後生のいい職業とはいえますまい、というのである。本気にそう思っているところがあるらしい様子だったので、きいているほうもシュンとしたことを覚えていた。

そんなことをいう一方、^④えらく太っ腹なこともいう。塔の工事では、まだ若くて経験が乏しく、塔材のような大木を扱うのは、これがはじめで、という若者もいた。そういう人にもさほどの分け隔てなく、仕事は割り振られたので、当人としてはうれしくもあり、不安でもあり、しかし仲間の手前、あとへは退ひけないから、緊張してカチカチになる。それでもとにかく、図面に従って墨をひく。さて切る段になる。ここで、もしや墨のひき違えなどしてはいはしないか、と迷い心が湧いてくる。はじめから自信といえるほどの胆きもの据わりはないのだから、ハタ目にも気の毒なほどハラハラと怖おそれている。若い大工さん仲間には、刃物をいれたら、ご命日ごめいじつという笑い言葉がある。間違って切ったが最後、もう処置なしだというのである。

こんな場面に出逢であうと、棟梁さんたちはニコニコしながらドンと肩をたたいてやって、おじけるな、しくじれば後始末は俺がしてやるぞという。檜二ひふた郎さんもそうだった。素早くギロギロツと目だけで量を点検し、大ニコニコで、しくじりゃ俺が面倒みてやるぞと調子を張った。若い大工は一寸頭をさげて挨拶あいさつし、やつと鋸のこぎりをおろした。

そのあと私は、檜二ひふた郎さんにきかすにはいられなかった——墨、大丈夫だったんでしょ。もし本当に失敗して切っちゃったら、あんな大材をどうする気？ 弁償するの、お施主と話合いにするの？ 棟梁は笑った。恐れてふるえているうちは失敗は少ないが、少し達者になってきた時は、ご命日ごめいじつになりかねないという。大工は毎日、ご命日の心配しながら仕事をするぞといっているもう年配の人もあるそうで、切るといっている神経にひびくらしい。

檜二ひふた郎さんは、未熟な若い人たちのこの恐れを、金額の損失におびえるだけではないと断定する。大材に気取け、位取けするのだし、そこへ切るといふ決定的な作業が加わるのだから、並みの感覚をもつ若者なら、恐れを生じるのが当然だ、という。大材には何百年の年数をかけた、それだけの威容そんごうというものが具そなわっている。だが、ただ若い大工を圧迫しているのではない。圧迫を与えると同時に、彼の胆力たんりきを育ててやっている。ここが見逃せない大切な点だ、と説く。その証拠に、一度大材を扱った若者は、ぐんと精神安定してくるそうである。^⑤木はさりげなく、大工を育てている、と檜二ひふた郎さんはいいたがっていた。よくよく木にやさしい人だったと思う。

問1

傍線部①「一番先に私に教えてくれたこと」は何か、最も適当なものを次の中から選びなさい。解答番号は、

6

- ① 立木としての生命を失ったあとにおいても、木は法隆寺のような永遠の生をもっているということ
- ② 木には、緑の葉をもつ第一の時と、材として利用される第二の時があることを法隆寺が証明したということ
- ③ 古い時代の塔を再建するときには、生の木ではなく山から切りだされて年数がたった古い材木を使えということ
- ④ 「木が生きている」ことを知り抜いている大工にしか、古塔の再建という難事業はまかせられないということ
- ⑤ 自然にはえている木は、切られて材木になったあとにも香りや復元力を維持し、第二の生をもつということ

問2

傍線部②「少し調子が重かった」のはなぜか、最も適当なものを次の中から選びなさい。解答番号は、

7

- ① 死んだ木を見せずに生きている木ばかり見せてきた自分に対して、それでは片手落ちではないかという自責があるから
- ② 木の寿命がつきて死を迎えた姿というものには特別の尊厳性と安らかさがあつて、それを筆者に見てほしかったから
- ③ 生きていても死んでいても、木というものは立派なものであるということを知ればきつと筆者の役に立つと思つていたから
- ④ 死んだ木をみてもらいたいという提案が、筆者にネガティブでマイナスの予感を与えるのではないかと迷つていたから
- ⑤ 西岡梢二郎さんがこれまで大切に扱ってきた檜と杉と松がついに死んでしまい、そのことで喪失感におそわれていたから

問3

空欄

A

にはいる文として最も適当なものを次の中から選びなさい。解答番号は、

8

- ① 理屈には合わないが、生きている木を見たら、生きつくしているということが実感できたらしい。
- ② 理屈には合わないが、なんのこだわりもなく鎮まっている木に名残惜しさを感じてしまったらしい。
- ③ 理屈には合わないが、死という縁起の悪いできごとに対して安息感、安堵感を抱いてしまったらしい。
- ④ 理屈には合わないが、生きつくしたのを見たら、生きているということが鮮明になったらしい。
- ⑤ 理屈には合わないが、木は生きているという教えが幻想にすぎないとはつきり納得できたらしい。

問4

傍線部③「こんな嘆き」の内容を述べた文として最も適当なものを次の中から選びなさい。解答番号は、

9

- ① 大工の活動はこれからも生き続ける木を殺し、地面に生きている無数の生命をも殺して、人の利己的な欲望を満足させるために働くわけだから、死んだあとにいくあの世では、きつとその報いをうけるであろう。
- ② 大工の仕事は一見ものをつくり、増やしているようにみえて、実は材料も道具も自分自身をも小さく減らしていくことしかしていないから、死後の来世では、神仏からあまり守ってもらえないにちがいない。
- ③ 大工の人生というものはすべにある環境の大きさをけずったり、小さくしたりする行為の連続で、この世の拡大や繁栄にすこしも寄与することがないから、さぞかし神仏はお怒りになっていることであろう。
- ④ 最近の若い大工の傾向として、大木を切るときにうまくできるだろうかと必要以上に緊張して失敗し、結果として施主さんに経済的な損失を与えてしまうケースが増えていることを強く心配している。
- ⑤ 大工という職業は「刃物をいれたら、ご命日」という言葉があるように、木を切るたびに神経をすり減らすことが多く、こうした大工が生まれ変わる来世ではきつと満足や喜びの少ない人生になるのであろう。
- ⑥ 大工のしていることは、結局はものを削り小さくするだけで何かを生み出すことをしていないので、あの世にいる神様仏様からみると罪作りの仕事ということになり死後はきつと地獄にゆくことになるのだろう。

問5 傍線部④「えらく太っ腹なこともいう」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から選びなさい。解答番号は、10。

- ① 塔材の大木を切ることは失敗がゆるされないと強い緊張を覚えている若い大工に向かい、失敗したら後始末は俺がする、と言うこと。
- ② 大材に気負け、位負けし、切ることがこわいと発言する若い大工たちに向かって、ニコニコしながら、しくじれば俺が面倒をみる、と言うこと。
- ③ 緊張してカチカチになって、からだの自由を失っている若い大工の肩をドンとたたいて、そのからだをほぐすかのように励ましの言葉をかけること。
- ④ 木は間違っただけで切れば廃材になるしかないので、その間違いをしたくないという大工に向かって、失敗したら俺が切る、と歯切れよく言うこと。
- ⑤ 塔材のような大木を扱う若くて未熟な大工が、仲間からの評価を気にして緊張している時に、たとえ失敗しても大丈夫だと声をかけること。

問6 傍線部⑤「木はさりげなく、大工を育てている」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から選びなさい。解答番号は、11。

- ① 大材の処理というきわめて難しい仕事に取り組み、見事にやりきった後の大工は、大きな達成感を体験するということ。
- ② 普通の木とちがって、古塔の再建に使用する木材には、大工の失敗を絶対に許さないような強い圧迫感があるということ。
- ③ 数百年の時を経た木がもおごそかな雰囲気には、若い大工のものに動じない精神力を引き出す力があるということ。
- ④ 木には若い大工たちだけに聞こえる声があり、それは「はやく一人前の大工になれよ」という励ましのメッセージだということ。
- ⑤ 長寿を経て、威風堂々たる気配をもった樹木でも、将来性のある若い大工が切るときにはその気配を消して応援するということ。

問7

傍線部⑥「木にやさしい人」とあるが、筆者がそのように表現する理由として最も適当なものを次の中から選びなさい。解答番号は、

12。

- ① 檜二郎さんが、木を決して金儲けの手段として扱わずに、いのちをもつ存在として、大工仕事のなかにおいて敬意をもち続けていた人だから。
- ② 檜二郎さんが、木とともに生きるしかない大工の棟梁として、常に熱意をもって若い大工を励まし、大切に育てようと努力し続けた人だから。
- ③ 檜二郎さんが、木をただの材としてみずに、その特徴や性質をはじめ人間に与える影響力に至るまで深く理解することができた人だから。
- ④ 檜二郎さんが一番の課題としていた若い大工の成長という分野で、その最大の協力者は「木」だと見抜いて、感謝の気持ちをもてた人だから。
- ⑤ 檜二郎さんが、大工ではない筆者に「木は二度の命をもつこと」や「木が若い大工を育てる」等の深い教えを惜しげもなく教えてくれた人だから。

三

次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

「わかる」という経験は、脳の中、あるいは肉体の内よりもはるかに広い場所で生起する。にもかかわらず、自然科学が理性をことさらに強調して、心的過程のすべてを脳内の物質現象に **A** しようとすることで「人の心は狭い所に閉じこめられてしまっている」。^{*} 岡潔は、このように嘆いた。

この身体、この感情、この意欲といえは本来はすむところを人はなぜか、**自分の**、この身体、**自分の**、この感情、**自分の**、この意欲と言わずにはいられない。ところが数学を通して何かを本当にわかろうとするときには、「**自分の**」^①という意識が障害になる。むしろ「**自分の**」という限定を消すことこそが、本当に何かを「わかる」ための条件ですらある。

「わかる」という経験の本来の深さを直截ちよくせつに示す例として、岡はしばしば「**他の**悲しみがわかる」ことについて書いている。

他の悲しみがわかるということは、他の悲しみの情に自分も染まることである。悲しくない自分が悲しい誰かの気持ちを推し量り、「理解」するのではない。本当に他の悲しみがわかるということは、自分もすっかり悲しくなることである。「他の」悲しみ、「自分の」悲しみという限定を超えて、端的な「この悲しみ」になりきることだ。「理で解るわか」のではなく、情がそれと **B** してしまふことである。

私たちは本来、生まれつき他者と共感する強い能力を持つている。一九九六年にイタリアのジャコモ・リゾラッティらがサルの実験で「ミラーニューロン」を発見して話題を呼んだ。サルがたとえば何かものを持ち上げる動作をすると、それに伴って脳の一部分が活動をする。ところが驚くべきことに、その同じ脳の部位の一部分が、他のサルが何かを持ち上げる動作を見ただけでも活動するのだ。自分が運動をしているときだけでなく、他者の運動を見ているときにも、その運動をさも自分がしているかのように脳が活動するのである。このように、他者の運動を模倣 (mirror) する機構が脳の中にあることを、彼らは明らかにした。

ミラーニューロンに関連して、ラマチャンドランという脳科学者が大変興味深い実験を遂行した。ミラーニューロンは実は、他者の運動だけでなく、他者の「痛み」をも模倣する。たとえば、目の前の人の手が金槌かなづちで思い切り叩たたかれるところを見たら、こちらまで思わず手を引っ込めてしまうだろう。目の前の人の「痛い！」という感覚を、見ているこちら側のミラーニューロンがコピーしてしまうからだ。それで思わずこちらも手を引っ込める。が、もちろん、本当に痛いわけではない。

ラマチャンドランはここに着目した。ミラーニューロンは、他者の運動や感覚を模倣する。他人が痛がっているときに、自分が痛いときに活動する脳の部位の一部分が発火している。ならばなぜ、こちらは本当に痛くならないのだろうか。

ラマチャンドランは、手の皮膚や関節にある受容体から「私は触られていない」という無効信号が出て、ミラーニューロンからの信号が意識にのぼるのを阻止しているのではないかと推測し、アイディアを C するためにハンフリーという、湾岸戦争で片腕を失った幻肢患者に協力を依頼した。

幻肢患者は一般に、腕がないにもかかわらず、まだそこに腕があるという幻想を抱いている。ハンフリーの場合は戦争で腕を失っていたのに、顔を触れられるたびに、失った手の感覚を感じていた。

ラマチャンドランはそんなハンフリーに、ジュリーという別の学生を見てもらいながら、ジュリーの手をなでたり叩いたりしてみせた。すると、ハンフリーは驚いた様子で、ジュリーの手がされていることを自分の幻肢に感じる、と叫んだ。

ラマチャンドランの予想通りの結果だった。ハンフリーのミラーニューロンは正常に活性化されたが、それを打ち消す手からの無効信号がないので、ハンフリーのミラーニューロンの活動が、そのまま意識体験として現れてしまったのである。

ラマチャンドラン自身が「獲得性過共感」と名付けたこの現象は、幻肢患者でなくても、健常者の腕に麻酔を打つだけでも再現できることがわかった。麻酔によって、皮膚からの感覚入力を遮断すると、誰もが文字通り、目の前の人と痛みを共有してしまうようになる。

「あなたの意識と別のだれかの意識をへだてている唯一のものは、あなたの皮膚かもしれないのだ！」とラマチャンドランは印象的な言葉でこの実験の報告を締めくくっている。

この実験は、私たちの心がいかに他者と通い合い、共感しやすいものであるかをまざまざと示している。脳の中に閉じ込められた心があつて、それが環境に漏れ出すのではなく、むしろ身体、環境を横断する大きな心がまずあつて、それが後から仮想的に「小さな私」へと限定されていくと考えるべきなのではないだろうか。

注 * 岡潔・・・数学者

「わかる」ということ」「数学する身体」、森田真生、新潮文庫

問1 空欄 A Aにはいる最も適当なことを次の中から選びなさい。解答番号は、13。

① 交換

② 還流

③ 交差

④ 選択

⑤ 還元

問2 空欄 B Bにはいる最も適当なことを次の中から選びなさい。解答番号は、14。

① 異化

② 同化

③ 混同

④ 錯覚

⑤ 媒介

問3 空欄 C Cにはいる最も適当なことを次の中から選びなさい。解答番号は、15。

① 実験

② 構築

③ 分析

④ 検証

⑤ 追求

問4 傍線部①「『自分の』という意識」を形成するものとして本文から読み取ることができるとは何か。最も適当なものを次の中から選び

なさい。解答番号は、

16。

- ① 身体、環境を横段する大きな心
- ② 他者の運動を模倣する機構
- ③ 脳の中に閉じ込められた心
- ④ 手の皮膚や関節にある受容体
- ⑤ 「獲得性過共感」

問5 傍線部②「大変興味深い実験」とあるが、どのような点が興味深いのか。最も適当なものを次の中から選びなさい。解答番号は、

17。

- ① ミラーニューロンが他人の痛みという感覚を模倣はするのに、実際には痛みと感じない理由を説明しようと努力した点
- ② 他人の手が思い切りたたかれたときに、見ている側が「痛い」と感じてしまう理由を皮膚の受容体から明らかにした点
- ③ 他人の運動を見ているときに、あたかも自分も同じ運動をしているかのように脳が活動する現象を明らかにした点
- ④ 他人の運動ばかりではなく、他人の感覚までも模倣するメカニズムが脳にはあることを「獲得性過共感」として説明した点
- ⑤ サルの実験で明らかになったミラーニューロンについて、人間にも同じものが存在することを幻肢患者の協力で証明した点

問6 傍線部③「それが後から仮想的に『小さな私』へと限定されていく」とはということか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

解答番号は、18。

- ① 子ども時代は共感力が豊かで、身体や環境を横断する大きな心を誰もがもっているが、年齢をかさね大人になるにつれてこの感覚がどんどん退化し忘れ去られるようになるということ。
- ② 「わかる」という経験は脳の中ではなく、それよりもはるかに広い場所で起きているのだが、人はその場所をはっきりと自覚できないため「自分だけ」が深く理解していると錯覚しがちだということ。
- ③ ラマチャンドランの実験が証明したように、皮膚や関節が発する「無効信号」のおかげで、人間は宇宙のような深くて広い現象を「自分ごと」として共感できるようになったということ。
- ④ 一九九六年のミラーニューロン発見以来、運動や感覚だけでなく感情までもが「模倣される」ことが科学的に証明され、それ以前の人々の活動の狭さを実感する人が増えたということ。
- ⑤ 私たちの心は、ほんらい他者や環境と共感的なつながりをもっているのだが、理性や自意識が旺盛になるにつれて、自他を区別する傾向がよくなっていくということ。

問7

本文の内容、展開について書かれた次の文の中から、最も適当なものを選びなさい。解答番号は、

19。

- ① 日本人である岡潔氏の「人の心は狭い所に閉じこめられてしまっている」との発言を例に挙げ、それとよく似た見解をもつ西洋のミラーニューロン研究との類似性を強調している。
- ② ミラーニューロンに関する科学上の成果に敬意を抱いている筆者は、その学説の正しさを読者に伝えるため、我が国が生んだ世界的な数学者、岡潔氏の発言を利用している。
- ③ 筆者は、理性をことさらに強調し自分の正しさだけを主張する現代の科学界の風潮を懸念し、その欠点を指摘するために岡潔の発言とミラーニューロン研究の二つを紹介している。
- ④ 岡潔氏の「わかる」ことに関する発言に興味や共感をいだいている筆者は、同氏の見解を補強するために、ミラーニューロンに関する実験や学説の内容を読者に紹介している。
- ⑤ 岡潔の発言の紹介のあとに、西洋のミラーニューロン研究の成果を確認することによって、筆者は「わかる」という経験には二つの段階が存在することを論証しようとしている。